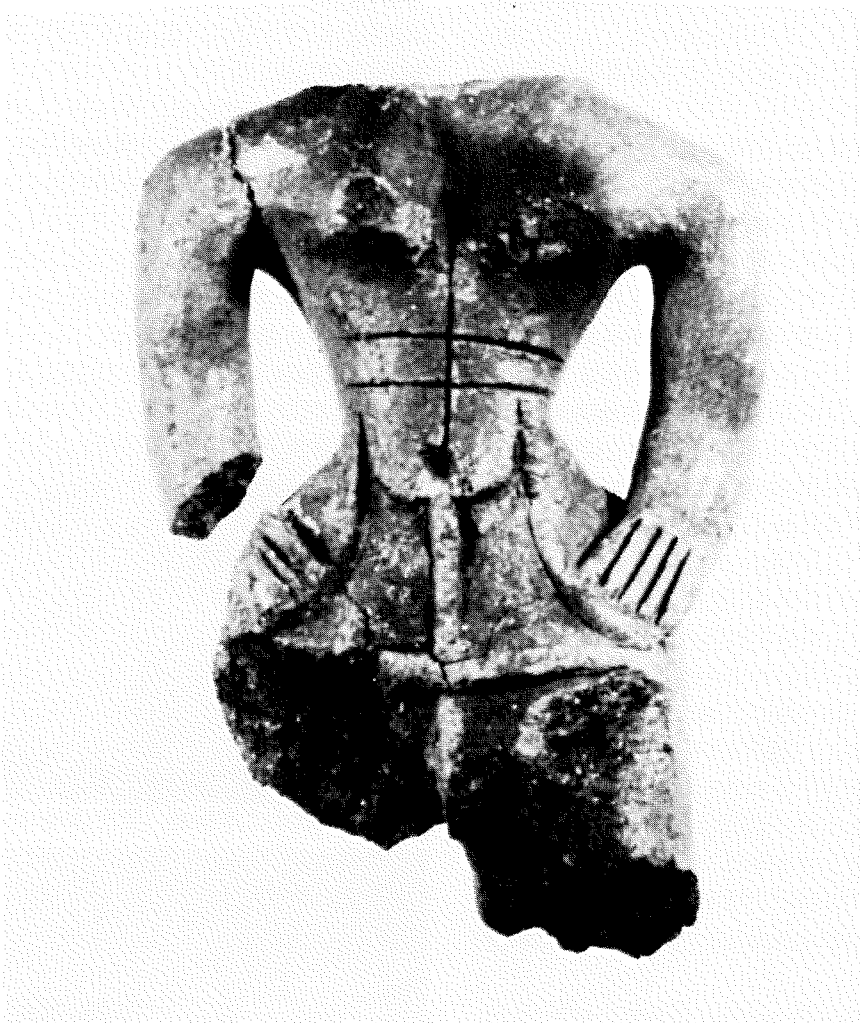


あるむせお

府中市郷土の森だより

No.12

al museo



本宿町遺跡出土の土偶

東海地方から運ばれた焼きもの

焼きものづくりにおいて、最も重要視されるのは「粘土」といえるでしょう。現代の陶芸家は交通機関の発達や陶芸ブームのおかげで、遠く離れた土地の粘土でも容易に入手できるようになりましたが、昔はとてもそんなわけにはいきませんでした。そのため窯はほとんどの場合良質な粘土を大量に確保できる場所のそばに築かれたのです。

愛知県・岐阜県など東海地方の一帯には、耐火度が高く良質な粘土が豊富に埋蔵されているので、古来、多くの窯場が営まれてきました。焼きものの代名詞ともなった「せともの」の瀬戸焼をはじめ、土管や大甕で有名な常滑焼、茶人に愛された美濃焼など、日本の名窯といわれる窯場がいくつもこの地方にあります。

東海地方の窯業の歴史は古く、古墳時代にまで溯ることができます。最初にこの地方でつくられたのは、青灰色で堅い焼きものの須恵器です。奈良時代を経て平安時代に至ると、この地方では須恵器よりもさらに進歩した二種類の焼きものが作られるようになりました。釉薬、すなわち、うわぐすりをかけられたこれらの焼きものは、灰釉陶器と緑釉陶器と呼ばれるものです。

灰釉陶器というのは、精選された粘土で作られた素地の上に、藁灰を材料にした釉をかけ、高い温度で焼成した焼きものです。平安時代の文献記録にみえる「白瓷」という焼きものが、この灰釉陶器にあたるといわれています。丈夫で割れにくく、白くて美しいこの焼きものは、当時、なかなかの貴重品だったと考えられています。

緑釉陶器は灰釉とは異なる性質の釉をかけた焼きものです。その釉は、鉛と珪石をおもな材料にして、それに色をだすために緑青を加えたものでした。独特のツヤのある釉は大変美しいもので、特に上等なものには釉の下に紋様が彫り込まれています(陰刻花文という)。緑釉陶器

のほとんどは緑一色の単彩のものですが、稀に、濃い緑色の釉で花を描いたものもあり、これらは二彩の別名があります。平安時代の文献記録のなかでは「青瓷」と記されているものが緑釉陶器にあたるようです。これは、当時の国産の焼きものなかでは、最高級に位置づけられるものでした。

さて、府中市内の奈良～平安時代の遺跡からは、こうした東海地方産の焼きものが出土することがあります。これは、当時の人々が大変な手間をかけて運んできたものです。当時貴重とされたこれらの焼きものの出土は、府中が武蔵国府の地であったことを如実に示すものといえるでしょう。特に、緑釉陶器については、その使用者が国府のなかでも高い地位にあった官人らに限られていたことが考えられます。(H a)



平安時代の二彩陶器 (高安寺境内出土)



現在の陶土採掘地 (岐阜県多治見市内)

植物群落の調査 その2

前回に引き続き、植物群落調査における標本抽出法について、今回はそのデータの取り方と処理の仕方をご紹介します。

＝群落測定の内容＝

1 m 方形ワクの抽出標本から得られるデータには色々な項目があります。全ての項目についてデータをとるのか、いくつか選んで取るのかは目的に応じて決めていくといいでしょう。

植被率：方形ワク内の全ての植物の葉や茎が地表をおおっている割合で、面積に対するパーセントで表します。

被度：ワク内でそれぞれの種がどのくらいの面積を占めるかの割合で、現在広く使われているのは、ブロン-ブロンケの評点です。被度が調査面積の3/4以上で5、1/2~3/4で4、1/4~1/2で3、個体数が極めて多いが、被度が1/10~1/4では2、個体数は多いが被度は1/20以下、または被度が1/10以下で個体数が少ない場合は1、個体数も少なく、被度も少ないものは+で表します。

密度：ワク内における各種類の個体数。単位面積あたりいくつ、と表します。

群度：ある種類が群落内でどのような広がり方をしているかをタイプ（型）別に1, 2, 3, 4, で表したものです。

高さ：各種類の自然高。垂れている葉はのばさずに計ります。とび抜けて高い1本がある時は除外したほうがいいでしょう。

重量：地上部を刈り取るか、地上部まで掘り取るかして重量を計ります。地上、地上部は別々に計ることが一般です。また生重量の他に乾燥重量を求めることもあります。

頻度：種類が出現する割合のことで、置いたワク数に対してその種類の出現したワク数の割合で表します。

これらのうち一般的には被度、群度と高さを調べますが、場合によっては被度のみ、密度のみ、重量のみを測定します。

＝記録の整理＝

さて集めたデータをどう処理すればいいのか、ここでは被度と高さを測定したときの例を紹介しましょう。（下表）まず種類ごとの平均値を求めますが、被度については被度階級5~1をそのまま数値として扱い、+は特に計算しません。この合計値を、設けたワクの数で割って平均値とします。高さについても同様に平均値を求めます。たとえその種類の出現しなかったワクがあっても、全ワク数で割ることが必要です。そうしないと各種類の群落内における勢力関係がわからなくなります。この平均被度と平均高が、群落内に優占する種を割り出す材料になります。さらに被度と高さを一本化した数値を導き、簡易に他種との比較ができるようにします。積算優占度（SDR）という指数がこれです。平均被度の最高値を100とし、これに対する他の値を換算したもの（被度数）と、同様に換算した高さの比数との平均値がこの場合のSDRになります。この値から、群落内での各植物の優占順位が決まるわけです。優占する植物の種類によってその場所の環境をとらえることができ、また時間を追って何度も調査することで、群落の変化を見出すこともできます。（N）

	C=被度		1		2		3		4		5		
	H=高さ		C	H	C	H	C	H	C	H	C	H	
1	ス	ス	キ	2	70	1	32	3	50	4	70	4	95
2	セイタカアワダチソウ	2	50	2	40	2	90	4	40	1	60		
3	フ	ユ	ク	サ	1	40		+	20	1	5	+	30

	10		頻度		平均値		相対値		SDR C'+H' 2	順位	生活型
	C	H	被度	高さ	被度C'	高さH'					
2	58	100	3.2	62.2	100	100	100	1	多		
1	72	100	1.8	52.7	56.3	84.7	70.5	2	多		
		40	0.2	9.5	6.3	15.2	10.8	8	1		

聖徳太子はいつ武蔵国に来たか

小野 一之

聖徳太子といえば、飛鳥時代に推古天皇の摂政として、蘇我馬子らとともに冠位十二階や十七条憲法を制定したり、四天王寺や法隆寺を建て仏教を広めるなど、日本の国家の基礎を築いた人物としてたいへん有名です。その聖徳太子が、当時としては東国の田舎、武蔵国にわざわざやって来たなどと信じられるでしょうか。そんな疑問はとりあえず措いといて、たいへん唐突ですが、太子がいつ武蔵にきたかという設問をいきなりしてしまいました。

しかしこれにはわけがあります。太子は全国に46の寺を建てたといわれることがありますが、そのなかに東国方面では長野の善光寺と秋田の四天王寺がふくまれています。また、太子は愛馬の黒駒に跨がり空中を飛んで（まさに日本のペガサス）、富士山や新潟の方まできたとか、いや全国66か国を飛び回ったのだとかいう話があるのです。武蔵の近くを通り過ぎたか、あるいは何かの用事で武蔵に立ち寄ったかもわからないからです。

それでは、当の武蔵には太子に関するどんなものが残っているのでしょうか。全国にはたくさん太子堂（太子を祭るお堂）があります。近辺では世田谷の太子堂が有名ですが、府中にも



府中市宮西町花蔵院の太子堂

大国魂神社の西側、住宅に囲まれて目立ちませんが、花蔵院という寺に太子堂があります。しかしこれは各地の太子信者が後世に建てたもので、もちろん武蔵に限ったことではありません。武蔵と太子の関係を言うならば、太子に仕えた物部兄麻呂という人物にまず注目すべきでしょう。平安時代中頃の太子の伝記『聖徳太子伝暦』には、太子の従者（舎人）として4人があげられ、その4番目に兄麻呂がいます（1番目は調子麻呂）。彼は太子の死後、武蔵国造に任じられたと書かれています。国造というのは、国府が置かれ国司が派遣されるようになる前の時代に各国を治めた役職の名で、地元の有力豪族が任命されました。武蔵国造となった兄麻呂も武蔵の豪族だったのでしょう。もともと兄麻呂という人物は他の記録には全く出てこないのが実在したかどうか疑ってみなくてはなりません。もし本当たとすれば、当時の武蔵の古墳のありかたから見て、兄麻呂の本拠地は、北武蔵の埼玉古墳群周辺（今の埼玉県行田市）以外には考えられないのです。

というわけで、今度は行田市付近を探ってみることにします。実はここでは驚くほどたくさんの太子の面影に出会うことができます。武蔵でもこれだけ太子伝承が多いところは、他にはないでしょう。まず、天洲寺という寺に聖徳太子十六歳像（太子が父用明天皇を看病する姿で孝養像と呼ばれます）があります。鎌倉時代の寛元5年（1247）に作られた像で、この形としては最も古い像の一つです。寺の縁起（『天洲寺聖徳皇太子十六歳鏡御影略縁起』）では、この像は太子の自作で奈良時代に行基が背負ってここまで持ってきたと伝えます。次に真観寺、ここには平安末期の素朴な聖観音像が残されています。

『小見郷真観寺縁起』によると、太子の命令で東国に使わされた鞍作鳥（飛鳥寺や法隆寺の仏

始爲舍人時年十八、癸亥年二月十五日出家、僧癸亥年天智天皇聖德太子生年十五之時始爲舍人、依好田獵太子不寵、壬申年悔過出家住法隆寺、禪行第一太子禮之、太子薨後年夏五月、發願自終、死舍人進江人膳臣清國能書被寵寫許、多經賜木仁、舍人人物部連兄曆爲性有、道心常以齋食後爲優、漢塞常侍左右、癸巳年賜武藏國造而退、賜小仁位、除四人外有氏之人等皆爲不合而罷者

『聖德太子伝曆』の物部兄麻呂の記事

像の作者として有名)がこの像を作り、寺も彼が建てたというのです。もうひとつは西行寺地蔵院、埼玉古墳群のなかの大円墳丸墓山古墳の麓にあつたといひ、今は、跡形もない寺です。この寺の縁起(『忍名所凶会』所載)はやや手が込んでいます。まず、黒駒に乗り舍人の調子麻呂を連れて富士山まで飛んで来た太子、四方を眺めると武蔵国埼玉郡の行田のあたりが霊地であることに一目で気がつく。太子は調子麻呂に、私は来年死ぬから私の墓をあそこに作つて地蔵を祭つてくれ、と述べる。翌年太子は予告どおり死んだので、調子麻呂は遺骨を持って武蔵に來たがどうしていいのかわからずにいると、骨が急に重たくなり動けなくなった。そこが太子のいう霊地に違いないと思い、骨を収め堂を作つた。これが地蔵院である、という具合です。

思わず吹き出したくなる話ですが、冷静に考えるといくつかの点を指摘することができます。前の二つの寺の縁起では、仏像が話の主題になっています。だいぶ時代が経って由緒ある仏像が

寺に残り、それを前提にして寺の縁起が作られたのでしよう。話が単純なことから考えても地蔵院の縁起よりも新しいと思います。次に、地蔵院の話では太子との関係の間に立つ人物が、同じ太子の舍人でも武蔵の物部兄麻呂ではなく調子麻呂だということです。つまり、太子の話をも武蔵に持ち帰つたのは兄麻呂ではありません。兄麻呂の時代とこの話の間には大きな開きがあります。そこで思い浮かぶのが、鎌倉時代の中頃に調子麻呂の子孫を称した顕真という法隆寺の僧のことです。彼は自分で書いた太子伝で調子麻呂の話の大いにふくらませました。太子は7つか8つの寺を建てたという従来の説を46か寺に広げて書いたのも彼です(『聖德太子伝私記』)。続いて、太子が黒駒で飛んでいった先を富士山から東海道15か国(武蔵を含むのでしよう)に話を広げたのは、鎌倉時代終わり頃の明白香の橋寺の僧法空です(『平氏伝雜勘文』)。天洲寺の太子像も最初に作られたのは相模国の鎌倉の地で、行田に運ばれたのはもう少し後になってからであることがわかっています。

さて、このあたりでそろそろ結論めいたことを述べることにしましょう。聖德太子はいつ武蔵に來たのか。おそらくは鎌倉時代末期以降のことであろう。それは実に太子が亡くなってから700年も経つてからのことだと。私はこのように考えてみました。つまり、聖德太子自身の問題であるよりも、後世の人々が太子を崇めた太子信仰の問題であるのです。



行田市天洲寺の例大祭 (1990.2.22)

—最近の発掘調査から—

今回は市内でも数少ない縄文時代中期のムラ（集落）の調査と、そこから出土した「土偶」について紹介します。

府中で発見されている縄文時代のムラは、早期初め頃の武蔵台遺跡、中期中頃の清水が丘遺跡などがあります。しかし、市内の縄文時代遺跡は過去にそれほど調査が行われていなかったため、遺跡の分布や内容については余り明らかではありません。

市内西寄りの本宿町1丁目に所在する「本宿町遺跡」は、今回初めて本格的に調査され、縄文時代中期の初頭から中頃にかけてのムラの一部が明らかになりました。遺跡は多摩川を南に望む段丘の崖（ハケ）上で、現在でも見晴らしの良い高台となっていて、すぐ崖下には飲水を得るための川（府中用水）が流れています。ムラは第5小学校の西側から市の西府苗圃にかけて広がっているものと推測され、今度の調査では、炉のある円形皿状の竪穴住居址4軒、ほぼ同じ頃の掘立柱の建物を支えた柱の穴多数、土坑（墓や貯蔵穴として作られた掘り込み）が約30基、黒曜石の石器を作ったと思われる作業場の址など、さまざまな施設が発見され、それに伴って多量の土器や石器が出土しました。また、中期の住居址の床下からは、全国的にも貴重な縄文時代草創期（約1万1000年前頃）の、縄を押しつけて文様を施した「押圧縄文土器」も検出されています。

ところで今回注目を集めたのは、何といても縄文時代中期の土偶が狭い範囲からまとまって出土したことでしょう。土偶は、縄文時代早期（約7千年前）から晩期にかけて東日本を中心に広くみられますが、東京西部では中期の時期に比較的多く出土することが知られています。今回の発掘調査では、住居址の埋土や柱の穴の中から出土しており、内訳は、頭1点、胴体4点、足4点、の計9点で、それぞれ別の個体です。なかには珍しく、腕や指の表現が実にリアルなものもあります。

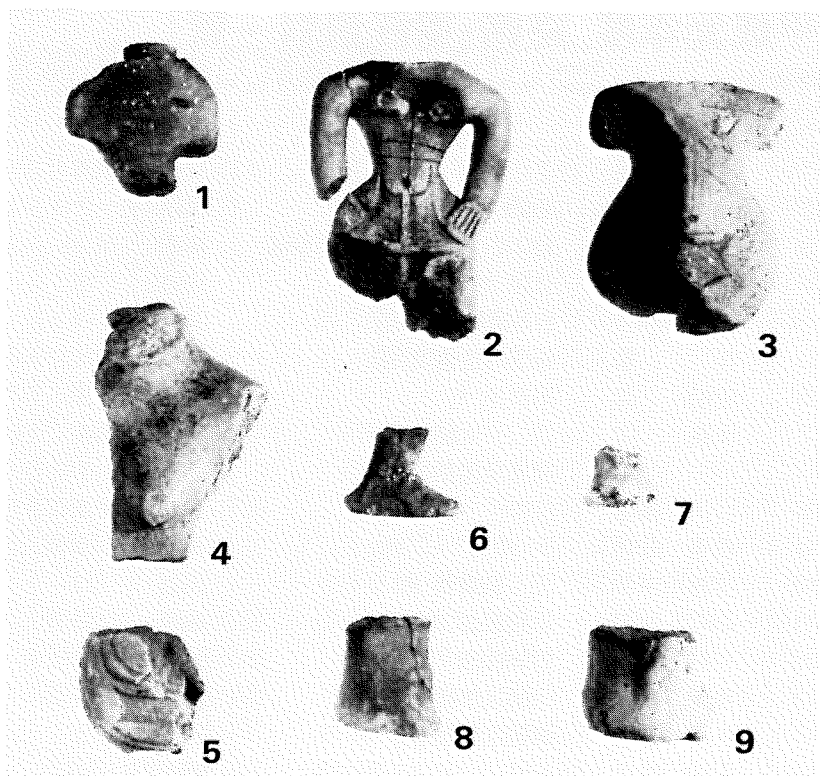
都内でも土偶がこれ程まとまって出土した遺

跡は少なく、八王子市の神谷原遺跡、多摩ニュータウン遺跡などがあるにすぎません。この時期の土偶（勝坂式土偶）を多量に出土する遺跡は、長野・山梨県の甲信地方によく知られています。山梨県の萩迎堂遺跡では1000点を越す土偶が発見されています。しかし、いずれの遺跡でも頭から足まで五体完全な形で残っているものはごく少なく、たいていは頭や手足がバラバラにもぎ取られた様に出てきます。また接合しても完全な形にならないのが普通です。このことが土偶の使われ方にヒントを与えてくれる様です。故意に壊すことによって、逆に新しい生命の誕生や甦りを祈願する象徴としてつくられたのではないかとされるゆえんです。その形や出土した状況から、土偶は女性像であり、生殖や新芽の萌芽などの動植物の豊饒を祈る「女神像」として祭られたのではないかと考える研究者もいます。生命の誕生の安全、植物などの再生を祈る、いわゆる「地母神信仰」と関連づけられることもあります。本宿町遺跡でも例外にもれず、いずれもウエストがくびれ、臀部・尻が良く張り出し、豊かな乳房が良く表現されていて、一見して女性像とわかります。腹部が良く膨んで明らかに妊娠した様子を表現したものもあります。他の遺跡では子供や壺を小脇にかかえた姿のもの（誕生土偶と呼ばれている）もあり、当時の人々の、生命再生の神秘と繁栄を象徴しているものであることは間違いないでしょう。土偶の壊れた箇所を観察すると、最初から壊れやすい様に形作られていることがわかります。土偶を用いて祭り、祈願が行われた後にはバラバラにされ、その機能—生命を失って2度と使われなかったのかも知れません。たいていは無造作にも、他の土器や石器の破片などのゴミとともに埋められた様で、丁寧に埋められた例はごくわずかです。また、ムラの外や他のムラへ運ばれた様な形跡もあります。さらに土偶からは当時の人々の服装をある程度復元することも可能です。今回出土した中にも、頭に髪を結った様な渦巻状の文様があるものや、胴体の腹部に入れ墨状の線が刻まれたものもあります。

府中周辺の武蔵野台地には数多くの縄文時代

中期のムラがあったことが知られていますが、土偶は出土しても1～2点、むしろ出土しないムラの方が多い程です。特定のムラで土偶を用いた祭祀を行っていたのかどうか明らかではありませんが、これは今後の研究課題といえます。

(第五学童クラブ地区の調査から 中山)



本宿町遺跡出土の土偶 (1.頭 2～5胴体 6～9足)

平成元年度の利用状況

(H1. 4. 1～H2. 3. 31) 開園日数300日

区分		有料		減免	合計
		一般	団体		
入園者	大人	72,075	6,010	427	78,512
	子供	26,067	8,924	1,192	36,183
	小計	98,142	14,934	1,619	114,695
博物館 入館者	大人	36,952	7,764	1,932	46,648
	子供	16,409	18,104	324	34,837
	小計	53,361	25,868	2,256	81,485
プラネタリウム 観覧者	大人	47,642	6,605	981	55,228
	子供	28,821	23,103	200	52,124
	小計	76,463	29,708	1,181	107,352
合計		227,966	70,510	5,056	303,532

単位(人)

[平成元年度 寄贈・寄託資料一覧]

■寄贈資料

	寄 贈 者	資 料 名	分 類	数 量	備 考
1	市川 正	クルリ棒 他	民俗	28	
2	横山百太郎	多摩川渡船ウデ 他	民俗	2	
3	二俣英五郎	府中むかしばなし絵本原画	美術	1 括	
4	桑田 八恵	衣服 他	民俗	19	
		叙勲関係資料 他	歴史	17	
5	林 繁	郵便貯金通帳 他	民俗	14	
6	佐伯 茂	車長持 他	民俗	3	
7	矢島 中	ランプ火屋 他	民俗	4	
		職業別電話名簿	歴史	1	昭和2年
8	八木 義雄	皿秤	民俗	1	
9	高橋 荘介	アサヒグラフ 他	民俗	3	
10	宇田川キク	二ツ組箆筒 他	民俗	11	
11	田中 明夫	千歯抜き 他	民俗	41	
12	小野 一之	御朱印帳	民俗	6	
13	後藤 与人	田植え筋縄	民俗	1	
14	高木 錠助	養蚕図掛軸 他	民俗	3	
15	河内 辰夫	石臼（台および蓋付き）	民俗	50	
16	田代 アキ	縄ない機 他	民俗	2	
17	大国魂神社	高札掲示台	歴史	1	昭和4年
18	木島 弘	郵便関係看板 他	民俗	7	
19	矢崎町消防団有志	消防団関係資料	民俗	3	ホース巻車, 分団旗, メガホン
20	小牧 亀吉	縄ない機	民俗	1	
21	平岩 通夫	長火鉢	民俗	1	
		蜂の巣	自然	1	
22	並木 ミツ	皿秤	民俗	1	
23	当麻 銀蔵	薬看板 他	民俗	65	
24	斎藤温次郎	Sレコード	民俗	28	ケース入り
25	小牧 武雄	貯穀器	民俗	2	
26	松村 年一	台秤 他	民俗	15	
27	島村 和子	湯タンポ	民俗	2	
28	島田千代吉	観音掛軸 他	民俗	2	
29	秋元 ふじ	番傘 他	民俗	73	

■寄託資料

	寄 託 者	資 料 名	分 類	数 量	備 考
1	小山 恭男	小野宮 内藤家文書	歴史	504	

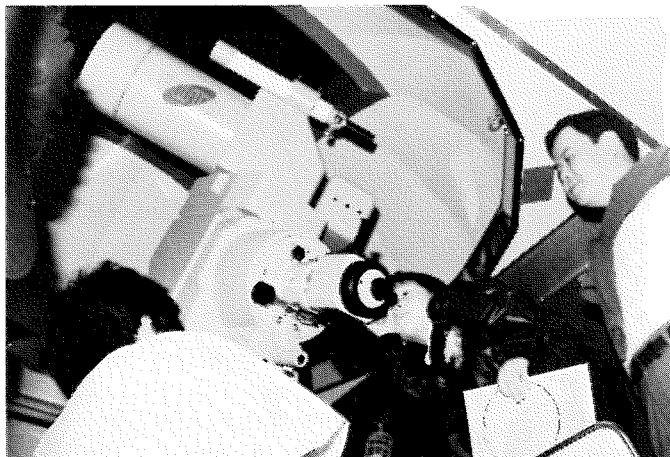


移動天文観測車 ペガサス 登場

郷土の森にこの4月に導入された、移動天文観測車“ペガサス”。この車は、4tトラックをベースに、直径2mの観測ドーム・車体安定装置・口径20cmフーデ式望遠鏡を設置した特別改造車です。フーデ式望遠鏡は、天体がどの方向にあつ

ても観測者の覗く位置が一定となり、子供から大人まで楽な姿勢で眺めることができます。

今後、ペガサスは郷土の森の星空観測会で利用する他、市内あるいは市民保養所へ出向いて星空観測会を実施する予定です。



◀ 星空観測会 4/28, 5/26

4/28にはペガサスで星を一目見ようと350人ものが郷土の森に集まりました。余りの人数に長蛇の列ができ、月しかみれなかったのですが、クレーター等を見て子供達は歓声をあげていました。つづいて5/26にも月や木星等を観望しました。

あれこれ

烏うちわ

玄関口の軒下に掲げられた「烏うちわ」。1954年（昭和29年）の府中のある家の光景です。

「烏うちわ」は毎年7月20日の大国魂神社の季子祭りで売られます。近在の多くの人々が、古いうちわを納め新しいうちわを求めて神社に足を運びます。季子祭りは「五穀豊饒」「悪疫防除」の祭りといわれ、うちわはこの日参道で売られる季子とともに、農作物の病虫害を除き、悪除けの役割を果たすと信じられてきました。この祭りの頃は、ちょうど水田では水や虫や雑草に悩まされる最中です。

さて、この年の前後に府中の農業にはいろいろな変化がありました。水稻の苗代は、水苗間から水の手間がかからない陸苗間へ。肥料も下肥（人糞）から化学肥料へと少しずつかわっていきました。日や杵を使ったもちつきも見られなくなりました。農家の副業であった養蚕も次

第に行われなくなり、桑畑が消えていきました。この年府中に市制が施かれたのは象徴的です。

あれから30数年。「烏うちわ」の需要はどんどん増えていきましたが、その機能は大きく変わっていきました。（〇）



郷土の森刊行物のご案内

- 府中市史 上巻3,000円 中・下巻2,800円
- 府中市の歴史 1,200円
- 府中市の文化財 300円
- 府中市の口伝え集 3,300円
- 府中市中心部街道ぞい家並変遷図 1,100円
- 府中むかしばなし絵本 1～3集 各600円
- 府中市郷土の森復原建築物報告書1～3集 2,600～4,700円
- 府中市郷土資料集(2),(4)～(11) 1,100～3,800円
- 武蔵府中叢書(2),(4)～(15) 2,200～6,200円
- 府中市自然調査報告書3,6～15 700～1,800円
- 府中市立郷土館紀要5～12号, 別冊1,000～1,600円
- 府中市郷土の森紀要1号 1,300円 2号1,500円
- 府中市郷土の森年報1～3号 400～800円
- 特別展 美術にみる梅 1,000円
- 特別展 富本憲吉—白磁と模様 900円

- 特別展 白亜紀展 1,000円
- 特別展 馬 500円
- 特別展 古代シリア文明展 1,500円

<新刊>

- 特別展 氷河期の狩人—武蔵野台地の旧石器 B5版 32頁 300円
- 府中市郷土資料集 大国魂神社文書Ⅲ A5版 502頁 5,000円
- 府中市郷土の森紀要 3号 B5版 122頁 1,300円

あるむせお 第12号
 al museo イタリア語
 “博物館で” “博物館にて”の意
 発行年月日 平成2年6月30日
 発行 府中市郷土の森
 〒183 東京都府中市南町6-32
 ☎0423-68-7921